

古文字資料の真贋

佐藤久美：文学部の学生。歴史一般に関心がある。

山村健一：情報科学部の学生。入門段階のいろいろな言葉の学習を
趣味としている。

安井教授：漢文の先生。いろいろな文字に関心がある。

第1回 真贋

第2回 甲骨文字

第3回 封泥

第4回 拓本

第1回目

《真贋》

安井教授：左は1997年7月4日の新聞報道（毎日新聞）です。



大英博物館が所蔵している敦煌写本には、紙質および筆の使い方からみて、多くの偽物が含まれているとのこと。ロンドン、北京、パリ、日本などの敦煌写本にも相当数の偽物が含まれているようだ、という報道に衝撃を受けたことを覚えています。この発表を受けて、2002年に *Dunhuang Manuscript Forgeries* (『贋作敦煌写本』) という研究書が大英博物館より発行されました。358 ページの大著です。扱う資料が贋作なのか本物なのかということについて敏感でなければならないことを思い知らされた次第です。

さて、今回は資料の真贋について勉強しようということでした。ここに甲骨文字が刻まれた断片があります。いかがでしょうか？



甲骨文字（改刻）

佐藤久美：この甲骨文字の断片の説明文ですが、「甲骨文字（改刻）」とあります。カイコク（改刻）って、どういう意味でしょうか？

安井教授：後から彫った、という意味です。

山村健一：後から彫ったといいますと、贋作だということですね。

安井教授：まあ、そういうことです。

これは亀の甲羅に最近になって文字を刻んだものですが、一部分は本物でそれに彫り足したものではないかと、淡い期待をいただいています。それに、亀の甲羅自体の真贋、つまり当時のものなのか、それとも新しいものなのか、まだ分かりません。こうした事情で、少し分かりにくい表現かもしれませんが「改刻」としました。もっとも、こういった専門用語があるわけではありません。

本物、贋作といっても実際にはいろいろなタイプがあるということを知ってください。

佐藤久美：古文字資料を扱うばあい本物と贋作はどのような違いとして考えた方がいいのでしょうか？

安井教授：本物と贋作をどのように考えるかということですが、たとえば、当時の偽札や偽金は二セモノですが、文字資料としてみれば、その当時の同時代資料ということになり、本物として扱うことができます。

山村健一：当時の資料が本物で、それに似せた後の時代の資料が贋作ということですね？

安井教授：はい。古文字資料を扱う場合、そういう見方というか、言葉の使い方が便利です。

佐藤久美：そうしますと、「本物」と「贋作」はどうやって見分けるのでしょうか？

安井教授：一つでも贋作の特徴が出ていれば、ハッキリと贋作だと言うことができます。いっぽう、これは本物だ、とハッキリ言うことはなかなか難しい。どの点をとっても問題がない、ということを実証するのは簡単なことではありません。

一般論として言えば、ある特徴が有ると言うのは簡単ですが、無いと言うのは難しい。全てに渡って調査をした後でなければ「無い」とは言えません。全てに渡って調査する、などということはできませんから、「問題が無い」と言い切ることもできないということになります。

もっともこれは理屈の上での話で、常識的には幾つかの項目を限ってその範囲で問題がなければ良いということになるのでしょう。

山村健一：そうしますと、本物を扱うために贋作の知識が必要ということですね？

安井教授：そのとおりです。本物かどうかというのはどこまでいっても決定はできませんが、「少なくともコレコレの項目について贋作の特徴はみられない」という認識は持っていなければなりません。ですから、資料を間違いなく扱うために、「贋作にどのようなパターンがあるか」という知識が必要になるというわけです。

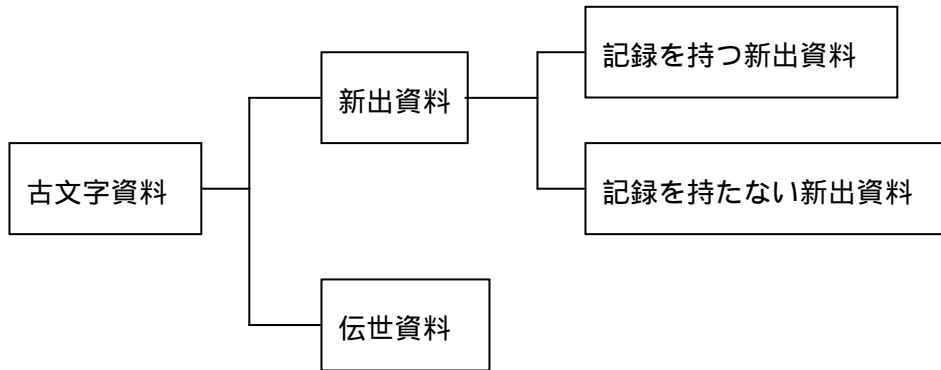
佐藤久美：贋作のパターンというのはどういう事でしょうか？

安井教授：贋作か否か、主に四つの方面から判断することができます。

- 一、発見の記録
- 二、資料の材質。錆や凹凸や汚れなど表面の経年の特徴
- 三、文様や形などの形状のパターン
- 四、文字情報

佐藤久美：一の「発見の記録」とはどういうことでしょうか？

安井教授：古文字資料には新しく世に現われた新出資料と、代々伝わってきた伝世資料があります。新出資料は、さらに、記録を持つ資料と記録を持たない資料に分けることができます。



新出資料には、地下から出土したものや、土塀の中から出てきたもの、仏像の体内から発見されたものなど様々なものがあります。その発見の事情が信頼できる記録として付されているものを「記録をもつ新出資料」とし、そのような記録のないものを「記録を持たない新出資料」とします。その他のものとして代々伝わってきた「伝世資料」があります。「伝世資料」にも伝世の状況の分かるものと分からないものがあります。

これ等の内、真贋が問題となるのは「記録を持たない新出資料」と「伝世資料」です。もっとも、最近では「記録を持つ新出資料」とされるものも実は創作であったなどという事例も報道されるので安心はできません。

それから、二に挙げた材質ですが、資料の一部を採取して科学的に成分を分析することになります。これを破壊検査といいます。直接破壊せずにエックス線を照射して成分を分析する方法もありますが、これは表面の成分しかわかりません。錆や凹凸や汚れなど見た目の経年の特徴による判断は長年の経験が必要です。この方面の文物を扱う業者さんはなかなかの目をもっていて、一目で分かるようです。

三の文様や形ですが、これらが時代に適合しているかどうかという判断は、土器の分類など考古学でよく使われるものです。このような判断をするためには美術史などの専門的な知識が必要となります。

四の文字情報ですが、文物に文字が記されている場合、これはなかなか有力な情報を提供してくれます。

それで、私たちは何によるかと言いますと、第四の文字情報によって真贋を判断したいとおもいます。文字情報から知ることのできる贋作のパターンを問題にするということです。そのパターンには、贋作一般に共通するものと、それぞれの資料に独自のものがあります。現物を見ながら体得するのが一番です。研究室に贋作が幾つかありますから、遊びのつもりで眺めてみましょう。

しばらくの間、毎週金曜日のこの時間に集まるということによろしいでしょうか？

佐藤・山村：はい、それでおねがいします。

・・・・・・第2回目は次のページからです・・・・・・

第2回目

・・・・・・・・安井教授の研究室。お茶を飲みながら・・・・・・・・

《甲骨文字》

安井教授：19世紀の末、古代殷王朝の占いの記録が刻み込まれた亀の甲羅や獣骨が発見されました。それはすぐに評判となり、高価な値段で取引されるようになりました。贋作も盛んに作られたようです。文字のある本物の甲骨片に文字を書き足して字数を増やしたものや、文字のない本物の甲骨片に新たに文字を彫り込んだりしたものがでてきました。果ては、新しい亀の甲羅や獣骨に文字を彫り込んだものまで出てきたようです。

これは前回話題にのぼった甲骨文字片です。縦が約4.3cm、横が約6.7cm、厚さが約5.4cmという小さなもので、亀の甲羅のようです。



佐藤久美：中央と左下に、それぞれ二行ずつ文字があります。なんと書いてあるのでしょうか？

安井教授：まず中央ですが、次のようにあります。



右： 禍 亓（天地逆） 卜 [欠落]

左： 雨 争 弗 禍

まず、右三字目の「卜」に注目してください。これは「うらなう」という意味の甲骨文字です。この文字の使われ方には一定の型があります。

最初に「日付を表わす干支」があり、その次に「卜（うらなう）」があり、次に「うらなう人の名前」がきます。うらなう人を貞人（テイジン）といいます。その貞人の名前の後に動詞の「貞（問う）」がきて、最後に「うらなう内容」とい順になります。これは全体で「～の日に卜（うらな）い、貞人の～が貞（と）う、……」という意味になります。

それで、右の「禍 亓 卜」ですが、「禍」は災いの意味、「亓」は貞人の名前です。

佐藤久美：そうしますと「禍 亓 卜」は甲骨文の型と一致しませんね。意味も通らないようです。左の行のほうは、どのような意味になるのでしょうか？

安井教授：二字目の「争」は貞人の名前として使われます。貞人の名は「貞う」という動詞の前にくるのがふつうですから、やはり意味が通りません。

「禍 亓 卜」と「雨 争 弗 禍」は、右から読んでも、左から読んでもダメだということです。

佐藤久美：右の2字目の「亓（天地逆）」は天地が逆だというお話ですが、これは問題ないのでしょうか？

安井教授：甲骨文字の場合、文字の左右が逆になった鏡文字はよく目にしますが、このように天地が逆になったものは、いけません。これも甲骨文字の贗作にしばしば見られます。

山村健一：甲骨片中央の二行は意味が通らないというのは分かりました。左下にも二行にわたって文字があります。こちらのほうは中央のものよりも、彫りが浅くて摩滅が進んでいるようにみえます。こちらは本物でしょうか？



右側： 羊 ト 比 (or 従)

左側： 争 禍 出

安井教授：これも中央の文字と同様に意味が通りません。

彫りの様子が中央と左下で異なるのは、おそらく最初に左下が彫られ、それを参考にして後に中央が彫り足されたということでしょう。それは「禍」の字形が両者とも同じになっていることから分かります。文字は多ければ多いほど価値が高まることから、本物の甲骨文字片に新たに文字を付け足して字数を増やす、というようなことはよく行われます。

あるいは、中央に文字を彫り足した人物は左下の文字を本物と思っていたかもしれません。じつは私も、左下の二行のうち、その一部分は本物ではないかと淡い期待をいただいたこともあったのですが、まあダメでしょうね。

ここらで一休みしましょう。

安井教授：さて、もう一つ甲骨文字片があります。



表



裏

安井教授：これも亀の甲羅です。縦が約 3.1cm、横が約 3.7cm、厚さが約 0.4cm という小さなものです。右の最後「{南+爰}」は右側に外れていますが、これは「ト」に続く文字です。

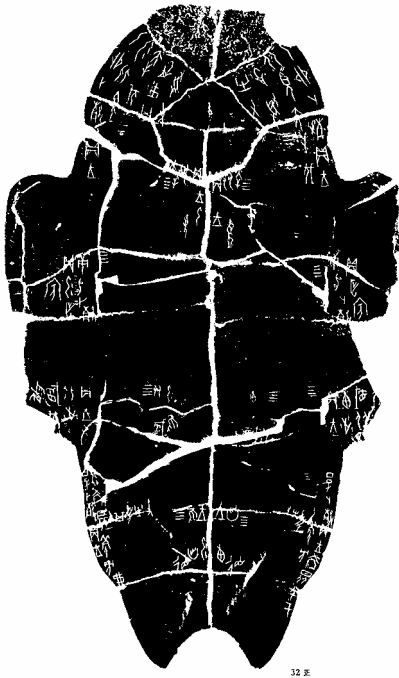
右：庚申ト {南+爰}
中：貞勿作
左：賓

これは、「庚申の日にト（うらな）い、{南+爰}が貞（と）う、賓をなさざらんか」ということになります。「{南+爰}」は貞人の名で、「賓」はある種の祭りです。庚申の日に占いをして、{南+爰}という名前の貞人が、「賓という祭りをすべきかどうか」と、おうかがいをたてたわけです。

佐藤久美：ちゃんと意味が通るようですから、こちらの方は本物ですね？

安井教授：さあ、どうでしょうか。

ここに、これまでに出土した甲骨文字資料の拓本を集めたものがあります。『商周甲骨文総集（一）』（巖一萍編、芸文印書館）という本で、その7ページに次のような拓本があります。右は拓本の一部を拡大したものです。いかがでしょうか？



一部分を拡大したもの

佐藤久美：これはいけませんね。文字の配置も内容も二つ目の甲骨片とまったく同じです。

安井教授：そうです。拓本の一部を真似て作ったというわけです。こういった贋作のパターンもあります。

佐藤久美：これまでの甲骨文にどのようなものがあるかを知るにはどうしたらいいのでしょうか？

安井教授：便利な索引があります。『殷虚甲骨刻辞類纂（上、中、下冊）』（姚孝遂主编。中華書局，1989年）というものがあって、これですぐに調べることができます。

佐藤久美：この甲骨片は先ほどのものと比べると、なにか生々しい感じがして、一目で亀の甲だとわかります。文字の彫りも浅いようです。

安井教授：そうですね。これは材質などからみても新しいものとわかります。

ところで、もしもこういったものが拓本になったらどうでしょうか、真贋の判別はなかなか難しいものになりそうです。索引に同じ表現がなく、内容の首尾が一貫していて字形にも問題がないというようなばあい、拓本であったならば、お手上げです。真贋の判断はつきません。首尾一貫した新たな甲骨文を書くためにはよほどの専門知識が必要ですから、ふつうには、そのような贋作があるというのは考えにくいのですが、皆無ではないことを肝に銘

じておかなければなりません。研究者の手が贋作を生み出す場合もあるわけ
です。

甲骨文字資料の真贋を論じた研究書に、沈之瑜という中国の方が書いた
『甲骨文講疏』（上海書店出版社、2002年）があります。この第八章に
「甲骨辯偽」という節があり参考になります。今日取り上げなかったいろい
ろな贋作のパターンが出ていますので目を通しておいってください。

今日はこれくらいにしておきましょう。

・・・・・・・・第3回目は次のページからです・・・・・・・・

第3回目

《封泥》

安井教授：きょうは封泥を用意しました。

山村健一：フウデイってなんですか？

安井教授：「封をする泥（トロ）」のことです。信書などに縄を掛け、その結び目に泥を置き、そこに印を押したものです。紀元前の戦国時代から紀元後の南北朝頃までのものがあるようです。まず実物を見てみましょう。

これは、印面の縦が約 2.38cm、横が約 2.35cm、厚さが約 1.57cm の封泥です。篆書体で「洛陽太守章」とあります。



右： 洛 陽
中： 太 守
左： 章

裏

佐藤久美：裏は縄目のあとでしょうか。なかなか立派なものですね。いつの時代のものでしょうか？

安井教授：紀元前の 104 年という年は、前漢の武帝の太初元年なのですが、歴史書によると、この頃から五字の印文と「章」という字の使用が始まったようです。これが前漢の中期で、晩期も「～太守章」は用いられます。前漢と後漢の間、王莽の新しい時代には「太守」は「太尹」に改められたので、新代は除きます。後漢以降「～太守章」というのはほとんど見られなくなります。ですからこの手の封泥は前漢の中期か晩期のものと考えてよさそうです。このあたりのことは『中国古代封泥』（孫慰祖著。上海人民出版社、2002 年）に書いてあります。この本には封泥の鮮明な写真が豊富にあり参考になりま

す。

山村君、そこにあるから覗いてみてください。

佐藤久美：ところで、この封泥のどこが問題となるのでしょうか？

安井教授：「太守」というのは郡という行政単位の長官なのですが、じつは洛陽というのは河南郡に属しています。ですから、河南太守はありえても、洛陽太守というのはあり得ないということになります。このように内容において矛盾があるというのも贋作のパターンの一つです。

山村健一：安井先生、どうもこの封泥の「太」の字と、『中国古代封泥』のものとは違うような気がします。この封泥の「太」は、両端に垂れ下がる腕が長すぎますし、中に縦に走る二本線が内側に湾曲しています。このような特徴は『中国古代封泥』には見られません。



研究室蔵封泥の「太」



前漢中期の「太」



前漢晩期の「太」

『中国古代封泥』による

安井教授：気が付きませんでした。言われてみるとそうですね。贋作の「太」は見覚えが良すぎるということでしょうか。何を参照したものか興味深いですね。いずれにしろ、字形が時代や地域によってどのように異なるかを把握することは、文字資料の時代判定や真贋の判定に欠かせないようです。

封泥の真贋についてですが、先ほど紹介した孫慰祖さんが書いた『封泥発現与研究』（上海書店出版社、2002年）という本の第四章の「封泥的辯偽」が参考になります。今日取り上げなかったいろいろな贋作のパターンが出ていますので目を通しておいってください。今日はこのくらいにしておきましょう。

来週は拓本を取り上げます。拓本くらいでしたら君たちの家にもあるかもしれません。もしあったら持ってきてください。

・・・・第4回目は次のページからです・・・・

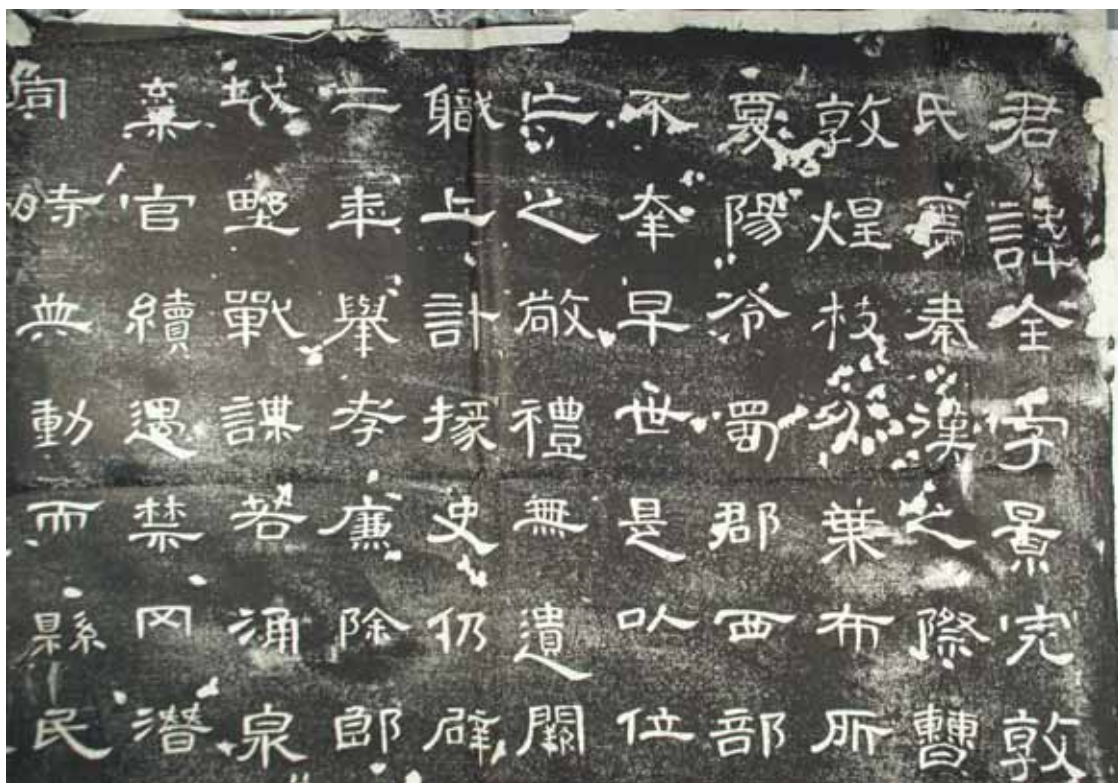
第4回目

《拓本》

安井教授：今日は拓本を見ようということでしたね。皆さんの家には何かありましたか？

佐藤久美：はい。これはどうでしょうか。

祖父が中国旅行のおりに買ったものです。



拓本の一部（右上・最初の部分）

安井教授：これは曹全碑（ソウゼンヒ）という碑文の拓本です。漢代の隸書（波を打った払いがある）として有名なもので、隸書の規範としてよく臨書されるようです。

拓本には、本物の碑石や青銅器から直接採った「原刻本」と、偽者を作りそれから拓を採った「翻刻本」（覆刻本、複刻本ともいう）があります。翻刻本は、かつては、遠隔地に現物があるなど何らかの理由で拓を採りにくい場合に作られたのですが、現在は写真も発達していますので、わざわざ翻刻本を作る必要はありません。それにも関わらず作られ販売される翻刻本は膺

作と言わざるを得ません。原刻本を板などに貼るなどして上から本物に似せて彫り複製を作ります。その複製から拓を採ったものが翻刻本です。質の悪いものは原刻本と比べるとすぐに分かります。

ここに『中国法書選 8 曹全碑 後漢』（二玄社、2004 年初版第 16 刷）があります。これは原刻本です。佐藤さんの拓本と見比べてみましょう。

・・・・・・作 業・・・・・・

佐藤久美：わたしの拓本はどうも翻刻本のようにです。8 行目の「二年舉孝廉」の「舉」ですが、最後の二画が余計にあります。



佐藤さんの拓本

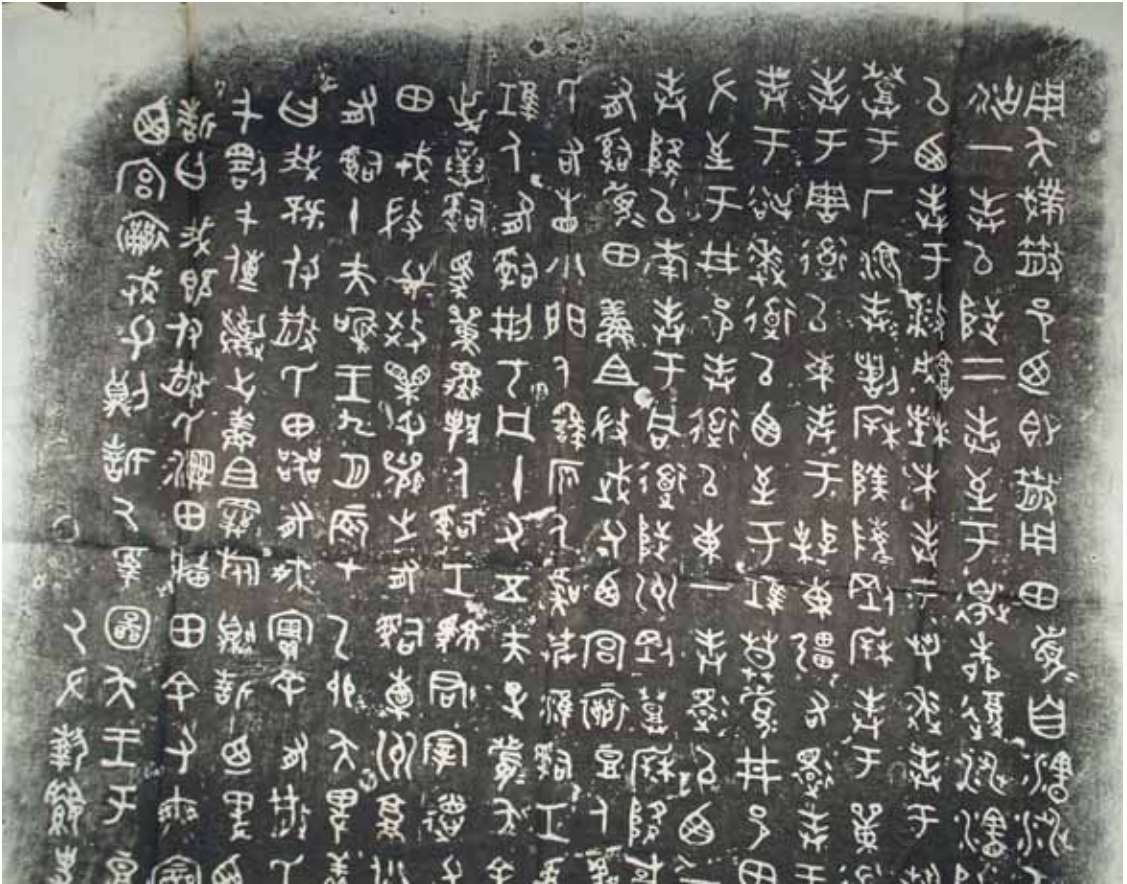


『中国法書選 8 曹全碑 後漢』による

安井教授：書道をされる方は「舉」などをみるまでもなく、一目でおかしいと感じる類のものなのでしょう。佐藤さんには申し訳ないけれど、質のわるい翻刻本のようにです。まあ、売店のおみやげ物の類でしょうか。

つぎに紹介する拓本はなかなか良くできた翻刻本です。西周末期の散氏盤という青銅器の拓本です。散氏盤の実物は、現在は台湾の故宫博物院にあり

ます。大変に有名なもので、数多くの原刻本が出版物として公になっています。



散氏盤翻刻本の上半分（研究室蔵）

ここに原刻本を掲載した本が何冊かあります。君たち見比べてください。

・・・・・・作業・・・・・・

佐藤久美：ほとんど区別が付きません。

山村健一：第 15 行目、上から 11 字目の字ですが、他の原刻本とは違いがあるようで

す。



ア

イ

ウ

エ

ア．研究室の拓本。

イ．『中国法書選1 殷・周・列国 甲骨文・金文』東京：二玄社，1991年。

ウ．『殷周金文集成釈文 第六巻』香港中文大学中国文化研究所，2001年。

エ．『三代吉金文存 上』羅振玉編。北京：中華書局，1989年第二次印刷。

安井教授：これは楷書の「實」に当たります。ウ冠の下、「毋」の字がアとイウエでは違うようですね。アは左上の角の部分が閉じているけれどもイウエはやや開いている。イウエはそれぞれ異なる原刻本ですから、角が開いているのは偶然に墨が入った結果ではなく、もともとそのような彫りになっているのでしょうか。

拓を採るときに、陰刻（彫りこんだ部分）の部分に墨が入り黒くなる場合はあるけれども、その逆はふつう起こりませんから、アはやはり翻刻のときに角を閉じて刻してしまったということでしょう。

佐藤久美：原刻本の写真が出版されている場合は見比べることができます。有名でない拓本の場合、比較するものがないということもあります。そのような場合、どうしたらいいのでしょうか？

安井教授：曹全碑や散氏盤は有名なものですから比較する原刻本を簡単に見ることができたわけです。比較するものがない場合、原刻本であるか、それとも翻刻本であるかの判断は、なかなか難しいのではないのでしょうか。

拓本の真贋については、仲威「第10講 碑帳鑑定」（『碑学10講』上海書画出版社、2005年）が参考になります。それから拓本には原刻本と翻刻本、重刻本と偽刻本、旧拓と新拓などの別があります。様々な拓本の実例は『墨 巻頭特集：拓本を楽しむ』（東京：芸術新聞社、2000年3・4月号通巻143号）に鮮明な写真として掲載されています。ぜひ目を通してください。

*****これで終わります。お疲れ様でした*****

以上は吉池孝一が担当しました